

ある日本語音声教材の現状を憂う

城 生 佰 太 郎

A Japanese phonetic textbook: the miserable present situation.

JÔO Hakutarô

There is one textbook with quite a low level about Japanese sounds.
For example:

- (1) It doesn't distinguish even between the difference of the International Phonetic symbols and the Roman alphabet notation.
- (2) It doesn't understand the right accent of the Tokyo dialect.
- (3) It confuses a syllable and Mora.
- (4) It misunderstands when shown like phonology and it ignores the level having to do with phonetics.

Future Japanese sound education should make an effort to reconsider the education which leans on abstract phonological theory and teaching learners sound facts tightly from the level having to do with phonetics.

1. はじめに

表題にある「ある日本語音声教材」とは、具体的には以下に取り上げるインターカルト日本語学校(2011)¹を指しており、もとより日本語教育における音声関係の教科書類すべてを意味するものではない。また、本稿で検討するインターカルト日本語学校(*ibid*)も、そもそもは偶然に書店で立ち読みをしている際に見つけたものであり、パラパラとページをめくっているうちに目に余る内容のひどさにおいても立ってもいられない心境となり、学生に注意を呼びかけるつもりで購入したのだが、結局は看過することができなくなり、キーボードに指がかかってしまったという次第である。

2. 言い訳の意味がわからない

まず、最初にある「はじめに」で著者たちが言っている

なお、このテキストは学習者のトレーニングを主眼としているため、使用されている発音記号やアクセント分類は、必ずしも音声学上のものと同様ではありません。(p.3)

の意味が不明である。つまり、学習者のトレーニングを主眼としたら、なぜ音声記号やアクセントの分類が音声学上のものと同様であってはならないのか、その理由がわからないのである。

具体的な記号類とアクセントの分類法に関しては後に述べるが、結論を先に述べれば、この本の著者たちが採択した表記法が、「学習者のトレーニングを主眼とした教材」を標榜する本書にとって最適の選択で

¹ 実質的な執筆者は筒井由美子氏であり、執筆協力者は喜多民子、大村礼子の両氏である。

あったという証拠は、特段私には見つからなかった。なお、付属のCD に関して、ところどころ録音内容について不適切であると思われる部分があるので、一部をサウンド・スペクトログラムによる実証的なデータを添えて指摘することとする。

3. 五十音図——日本語のアルファベット

さっそく、第1課に示されている五十音図と、これに対応する音声記号²の検討を行ってみよう。図01に、原著のp.20に示してある五十音図の一覧表を示す。

図01で、特に筆者の目を引く部分は、

CD
01

練習

した ひょう さんこう
 下の表を参考にして、

き おと
 聞こえる音のとおり

よ
 に読みましょう。

あ [a]	い [i]	う [u]	え [e]	お [o]										
か [ka]	き [ki]	く [ku]	け [ke]	こ [ko]	が [ga]	ぎ [gi]	ぐ [gu]	げ [ge]	ご [go]					
さ [sa]	し [ʃi]	す [su]	せ [se]	そ [so]	ざ [za]	じ [ʒi]	ず [zu]	ぜ [ze]	ぞ [zo]					
た [ta]	ち [tʃi]	つ [tsu]	て [te]	と [to]	だ [da]	ぢ [dʒi]	づ [dzu]	で [de]	ど [do]					
な [na]	に [ni]	ぬ [nu]	ね [ne]	の [no]										
は [ha]	ひ [çi]	ふ [ɸu]	へ [he]	ほ [ho]	ば [ba]	び [bi]	ぶ [bu]	べ [be]	ぼ [bo]	ぱ [pa]	ぴ [pi]	ぷ [pu]	ぺ [pe]	ぽ [po]
ま [ma]	み [mi]	む [mu]	め [me]	も [mo]										
や [ja]	(い) [i]	ゆ [ju]	(え) [e]	よ [jo]										
ら [ra]	り [ri]	る [ru]	れ [re]	ろ [ro]	<small>はつおんきごう</small> <small>こくさいおんせいきごう</small> ※いくつかの発音記号は国際音声記号を取り入れています。									
わ [wa]	(い) [i]	う [u]	え [e]	(を) [o]	<small>おな</small> <small>はつおん</small> ※「お」と「を」は同じ発音です。									

図01 五十音表 インターカルト日本語学校 (2011:20) より引用

2 著者たちの言葉を引用すれば「発音記号」だが、本稿では特に避けられない場合を除き術語としては「音声記号」を用いる。

し、ざ、じ、ず、ぜ、ぞ、ち、ぢ、づ、に

の10種類のかなに対応する音声表記と、外来語やオノマトペなどに多用されている

スイ、ズイ、トウ、ドウ、ファ、フィ、フェ、フォ、ウィ、ウエ、ウオ

などの音種がまったく無視されている点である。また、母音の発音を示しているCD1-02で、著者たちは楽譜を用いて日本語のアクセントは強弱ではなく高低なので、

音楽でいえば「ミ」&「ソ」（または「ド」&「ミ」）です。(p.21)

としているが、これは音韻論的分析結果と音声学的分析結果との違いを理解していないということである。音声学的レベルの情報は、いうまでもなく言語事実に最も近い情報であるがゆえに、特に初級の外国語学習者にとっては不可欠のものである。にもかかわらず、はじめから抽象的なレベルで理論化された結果を与えることは、これから外国語の音声事実と取り組もうとしている学習者にとっては、あえて比喩的表現を用いるならば「目隠しをしてしまう」ようなものである。

図02に、著者たちが制作したCDに収録されている該当箇所のpitchを杉スピーチ・アナライザーを用いて解析した結果を示す。なお、上段は原波形、下段はピッチを示す。ピッチ曲線の下に打ってある「アイウエオ」は、それぞれ真上の曲線に該当する位置を示している。

この解析結果から、初頭の「ア」は180Hz程度で、「イ」「ウ」が

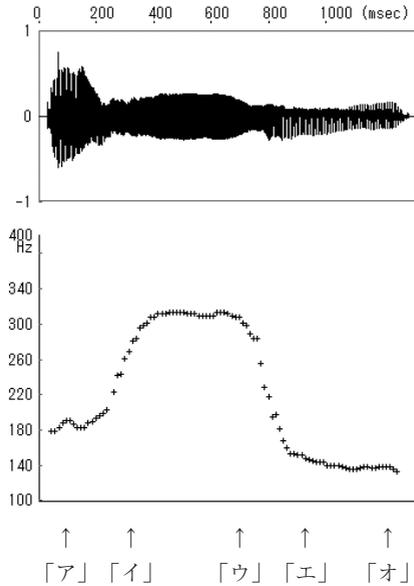


図02 「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」

300Hz程度、そして最後の「オ」が140Hz程度であることがわかる。従って、音声学的レベルでこれらを「高」や「低」で表すとすれば、「中高高低低」とすべき性質のものである。なお、この音調パターンは東京のアクセントを身につけている人であれば、ナンセンスな「ボコチョコビラ」であっても同じになることがわかっている。また、ここで明らかにしたように、音声学的レベルでは東京型のアクセントを学習する際には、「高・中・低」の3段による表記の方が望ましいということも、このわずかな導入部分から窺知されるのである。

では次に、上に指摘した音種に関する問題を考える。もちろん、学習は基礎の基礎からはじめるのだから、拡大五十音や筆者の提唱している

「超拡大五十音³」などは、この本では扱う必要がないと筆者たちはお互い暗黙のうちにコンセンサスを得て、ここでは言及していないのかもしれない。しかし、学習者が一歩教室の外へ足を踏み出したとたんに、これらのあらゆる音種が「現代日本語」として怒涛のごとく押し寄せてくるという現実がある。このことを、執筆者たちはどう受け止めているのだろうか？

このような観点から、私はあえて教室レベルではもっと手厚く、親切で丁寧な教授が望ましい姿勢であると主張しておく。したがって、拗音についても

キャ、キュ、キョ、ギャ、ギユ、ギョ、シャ、シュ、シエ、シヨ、
ジャ、ジュ、ジェ、ジョ、チャ、チュ、チェ、チヨ、ニャ、ニユ、
ニエ、ニヨ、ヒャ、ヒユ、ヒエ、ヒヨ、ピャ、ピユ、ピエ、ピヨ、
ピャ、ピユ、ピエ、ピヨ、ミャ、ミユ、ミエ、ミヨ、リャ、リュ、
リエ、リヨ

など、現実に使われている音に関しては一通りすべてを示すのが、外国語としての日本語を教授する立場の人にとっては当然の義務であろうと考える。

次に、音声表記の問題だが、「シ」を [ʃi]、「ジ」や「ヂ」を [ʒi]、[dʒi]、「チ」を [tʃi]、「ヅ」を [dʒu]、「ニ」を [ni] などと表記しているところが、まずは困った点である。インターカルト日本語学校(2011)の著者たちは、後の章に出てくる「実際のジの音」というコラム記事(p.29)では正しい知識を授けているのだが、この図01だけを見

³ 城生佰太郎(1998)の第3章、城生佰太郎(2012)の第2部第6章など。

た学習者は、間違いなく「ジ」・「ヂ」・「ズ」・「ヅ」の4種を中世日本語の段階までタイムスリップして、いわゆる「四つ仮名」として捉えてしまう危険性が極めて高い。すなわち、現代日本語では「ジ」と書く摩擦音の [ʒi] だが、「ヂ」と書けば破擦音の [dʒi] となる。同様に、「ズ」と書く摩擦音の [zɯ] だが「ヅ」と書けば破擦音の [dzɯ] になるという思い込みである。

しかしながら、事実はそうではない。語のどの位置に現れるかが大きな決定要因となっているのだ。すなわち、語頭や「ン」「ッ」などの直後では、表記が「ジ」であろうが「ヂ」であろうが「ズ」であろうが「ヅ」であろうが、いっさいおかまいなしに破擦音として実現される。いっぽう、それ以外の位置的環境では摩擦音または弱破擦音となる。

ちなみに、音声表記のほうも [ʒi], [dʒi], [tʃi], [fi] などに用いられている [ʃ] や [ʒ] の代わりに、[ç] (巻尾つきc) や [ʒ] (巻尾つきz) などを用いる必要がある。その理由は、印欧系の諸言語で用いられている [ʃ] や [ʒ] が調音位置による分類では「後部歯茎音」とされており、日本語をはじめとしてアジアの多くの地域に分布している巻尾つきcや巻尾つきzなどの「歯茎硬口蓋音」よりも調音する際のポイントが前に構えられているため、結果として必然的に音質も明らかに異なる音が生産されるからにほかならない。

ついでに敷衍しておくが、この本の著者たちは「ニ」を [ni] と表記しているが、これも大いなる事実誤認である。[n] で表記される音は調音位置が歯茎のあたりにある。しかるに「ニヤ、ニ、ニユ、ニエ、ニョ」を調音する際の調音位置は、[n] よりもはるか後方にあたる前部硬口蓋から硬口蓋にかけての位置である。したがって、音声記号は断じて [n] であってはならず、硬口蓋音を示す [ɲ] を用いるか、さもなければ [ç] や [ʒ] と同様に歯茎硬口蓋音の [ɲ] (巻き尾付きn)

を用いるべきである。

ところで、私が冒頭に述べた引用箇所、

なお、このテキストは学習者のトレーニングを主眼としているため、使用されている発音記号やアクセント分類は、必ずしも音声学上のものと同様ではありません。(p.3)

というのは、もしかして具体的にはこのようなことを意味していたのであろうか。つまり、この本はトレーニングを主たる目的としているのだから、学習者にあえて煩瑣な記号を覚えさせる労力を惜しむがゆえに、記号のほうは簡素化したのだという趣旨の断りなのであろうか。

ここで百歩ゆずって、巻き尾付きc,z,nなどという特殊記号は厄介だから、簡素化するということこそが学習者への配慮であるという主張があったとしよう。しかし、だからといって異なる音である「ニ」と「ナ、ヌ、ネ、ノ」などを、まったく同じ記号で表記しても良いなどという理屈はありえない。国際音声記号は、それ相応の試練を経て今日にいたっている。このことを思えば、その場しのぎでいろいろな記号類を覚えさせるよりも、かえって将来のことを見越せば、はじめから正式な記号類を教えることのほうが、親切な教授法というものではないのか。

さらに付け加えておくと、[e] や [z] よりも [ɲ] や [ʒ] のほうが一般的であるという理由で [e] や [z] をあえて教えないという人もいる。しかし、[e] や [z] よりも [ɲ] や [ʒ] のほうが一般的であると思っているのは、小中学校のころから英語漬けで育てられてきた平均的な日本人だからこそその発想である。ちなみに、モンゴル人にとっては英語の音声も日本語の音声も同じくらい日常性から程遠いので、[ɲ] や [ʒ] を学習することと [e] や [z] を学習することは、どちらも

同じくらい努力を要することとなり、だからこそはじめからより正確な記号を覚えるほうが理にかなっているということになる。

4. 子音（1）

まず、前節でも触れたことだが、[ʃ] および [ʒ]に関する問題を取り上げる。繰り返しになるが、これらの記号で指示される音は「後部歯茎音」である。これに随伴して、口唇もしばしばまるめを伴う。しかし、日本語や中国語などに見られる類似の音は、いずれも [ʃ] および [ʒ] よりも調音位置が後退した「歯茎硬口蓋音」である。また、口唇のまるめもまったく観察されない。

このことは、インターカルト日本語学校（2011）の著者たちも、同書のp.29で注意を喚起している。該当箇所を引用すると、

[ʃ] (し)、[ʒ] (じ) の舌の位置

前略…

また、発音するときは、口を丸くしないでください（英語の [ʃ] [ʒ] とは違う音です）。

とある。にもかかわらず、記号は同じである。これでは、海外からの学習者には何のことだかさっぱり要を得ないであろう。違う音には違う記号をあてる。このことは、音声記号における鉄則なのだから、違う音だと認めたからには違う記号をあてなければならない。

なお、同様にして「ち」「ちゅ」などを [tʃ] と表記しておいてから、

英語の [tʃ] とは違います。(p.31)

と断り書きがしてある。やはり、違う音ならば、きっぱりと異なる記号を充当すべきである。

このような執筆態度が見られる一方で、これとは正反対に、ラ行子音のところでは、

英語の [r] とは違います。英語の話者の方は、[r] にならないように、十分気をつけてこの音を練習してください。(p.36)

としてある部分で、音声記号のほうも [r] とは異なる [r̥] がしっかりと使われている。私に言わせれば、ラ行の子音でこのような書き方(すなわち国際音声記号を用いること)をするのなら、なぜ全編を通して同一の執筆態度を貫くことが出来なかったのだろうかと訝られる。

なお、この本では「ン」に独立の節を立てて、第1章の第5節で丁寧いぶかに説明している。記号のほうも、p.49に口蓋垂鼻音を表す [ŋ] が用いられており、一見すると良さそうに見える。しかし、次のページを見ると、

大原則「ん」≠ [n]

「ん」を [n] という発音で読んではいけません。

こんやく (婚約) × [conyaku]

○ [conyaku]

となっているではないか。これでは、支離滅裂である。少なくとも角カッコに入れて音声記号を用いるからには、ローマ字とは明瞭に区別してもらわないと不毛な混乱を生じてしまう。この本の著者たちは、おそらく [ko-ŋa-ku] ではなく [kon-ja-ku] と調音しなければならないと注意するつもりであったのだろう。

鼻音に関してさらに付け加えれば、異音として生じる [m] [ɲ] [ŋ] などに対する言及がまったくない点も、本書が実用語学を標榜する著書であることを考えれば、問題である。また、引用部分にもあるように、「…という発音で読んではいけません。」という指示には、愕然とさせられるものがある。つまり、この本の著者たちは音声を教えているはずなのに、どこまでいっても文字言語の呪縛から解放されず、音声でさえ常に「文字を音読したもの」という意識しか持ち得ないのではないかと疑われるからにはほかならない。

5. 子音 (2)

その他、散発的に気づいた点を挙げておくと、はじめの方に戻るが、p.20で五十音の一覧表を調音している部分の「カキクケコ」「タチツテト」「ラリルレロ」に、一部不適切な調音が収録されている。図03は、「カキクケコ」を示したものである。

「ク」を除くすべての調音は、ボトムに水平方向に太く安定したフォ



「カ」 「キ」 「ク」 「ケ」 「コ」

図03 カ行子音

ある日本語音声教材の現状を憂う

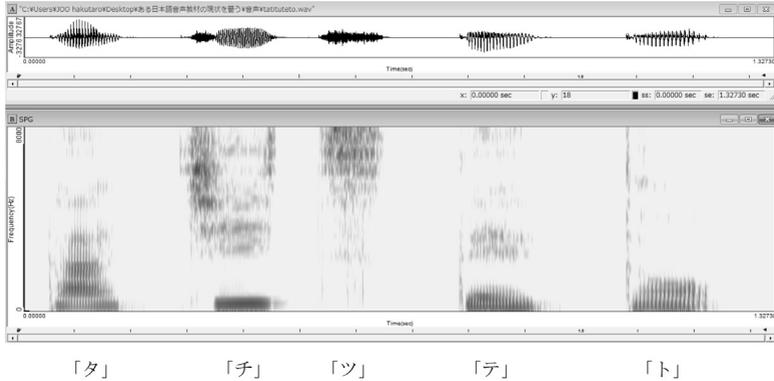


図04 タ行子音

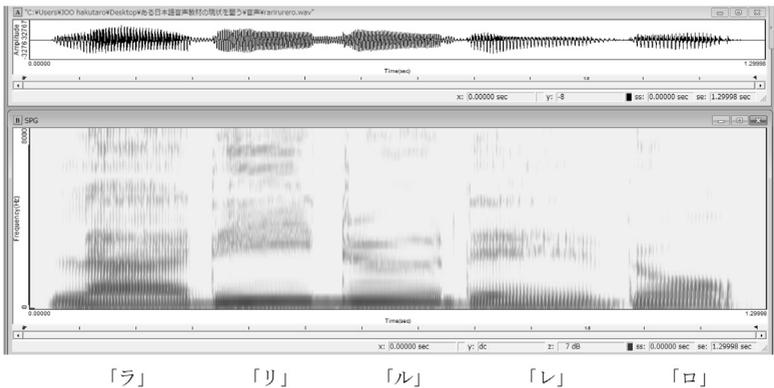


図05 ラ行子音

ルマントが検出されているが、「ク」だけにはこれが出ていない。ということは、モデルの調音がこの「ク」のみで母音の無声化を起こして録音されてしまったということである。1音ごとのデモの場面では、母音もていねいに調音すべきであることは、いまさらここに改めて言うまで

もない。

同様に、図04に「タチツテト」を示す。やはり、「ツ」だけが母音の無声化を起こしている。ちなみに、こうしてスペクトログラムで確認するまでもなく耳で聞いただけでも母音がまったく響かず、まことに奇異な感じを受ける。

次いで、ラ行のデモを解析した結果を図05に示す。この音は、後にp.36でも詳しく述べられているように、はじき音である。従って、デモも当然そのはじき音を調音していなければならない。しかるに、結果は図のとおりであって、「ラ」だけを異質の子音で調音している。なお、これをIPAで表記すれば側面接近音にかなり近い音なので [l̪] ということになる。いわゆる、近年はやりの「l音化現象」がこんなところにも顔を出してしまった。たしかに、このような調音も事実として存在するという情報はどこかで紹介してもよいとは思いますが、デモとしてのこの場面では不適である。

次に示すのは、有声音の [g] と無声音の [k] を区別するという趣旨のデモからの引用である。

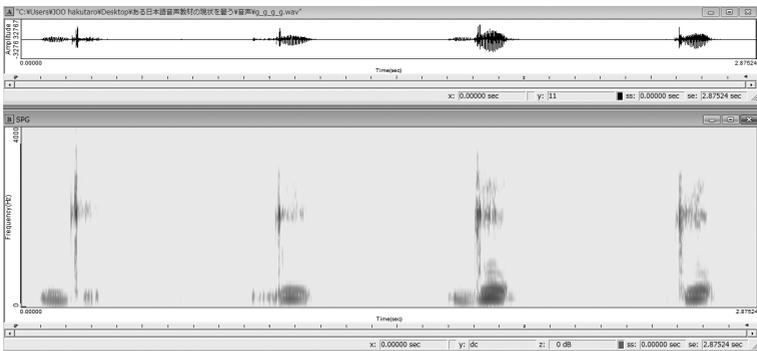


図06 有声音の [g]

図 06 は、これらのうちから有声音の [g] だけを 4 回調音している部分を引用して解析したものだが、一回目は有声音である証拠が左フットに出ている -VOT から実証できるが、これに続く [ə] が弱々しすぎて聞こえない。音響音声学を専門としていない人たちは、ここの部分が本質的な部分ではないので、ことさらに [ə] などが響かなくても良いと思うかもしれない。しかし、この連鎖を聞いた聴覚印象では、先行している [g] までもがかすれて聞こえてしまい、せっかくの有声音性が十分には伝わらない。

2 回目は、後続する母音部はなんとかなっているが、先行の肝心な子音部が弱々しすぎてスペクトログラム上からも -VOT がほとんど出ない。すなわち、声帯振動が不十分であったという証拠である。3 回目は、事ここに至ってようやく子音部も母音部も問題なく調音できるようになった。しかし、最後の 4 回目は最悪で、子音部分には -VOT がまったく看取されない。つまりは、この調音は立派な無声子音になってしまったということである。

その他、細かく見て行けばこのような問題点はまだほかにも指摘できるが、紙数の関係でここで再び表記の問題を指摘しておく。はじめに、問題点をひとことでまとめておけば、音声記号表記とローマ字表記との区別が不分明であるという点である。たとえば、「やっぱり」の表記だが、この本では次のようになっている。

やっぱり [yappari] (p.56)

せっかくラ行子音に IPA の [r] を用いておきながら、「や」をローマ字表記にしてしまったという点に表記姿勢における首尾一貫性の欠如が見られる。また、いずれも p.58 の「CD1-72」にあたる部分の引用だが、

おかあさん [oka:sa:n]
おにいさん [oni:sa:n]
ふうふ [fu:fu]
おねえさん [one:sa:n]
おとうさん [oto:sa:n]
とおい [to:i]

などがある。前のところで、せっかく口蓋垂鼻音 [ŋ] や両唇摩擦音 [ɸ] などを用いておりながら、ここへ来て突然 [n] や [f] に豹変するというのは、いったいいかなる理由によるのだろうか、私にはまったく理解不能である。

なお、同様の例はp.58-62にかけてもさらに続いている。それらのうちから一部を引用して示すと、

東京 [to:kjo:]
少々 [sho:sho:]
コーヒー [ko:hi:]
おじいさん [oji:sa:n]
おじさん [ojisa:n]
きれい [kire:]

などとなっている。いつのまにか、音声記号とローマ字表記との区別がつかなくなっている。これでは、学習者が混乱することは必至である。

6. リズムとアクセント

6.1. リズム

この本におけるリズムの扱い方には、類書とは異なる著者たちの工夫が見られ、その点では優れていると思う。音楽でおなじみの楽譜を使ったり、歌における歌詞を利用したり、2拍で1まとまりをなすリズム単位が出発点であるというしっかりとしたリズム感を、日本語のリズムの根底に見られる理論的な基盤としているという点である。

しかしながら、細部にわたって検討すると、やはり問題点がないわけではない。たとえばカナ表記の問題だが、p.88には、つぎのような記述がある。

9 クー (またはキュウ)

10 ジュウ

他の部分では、ほぼ「ニー」「ゴー」「ロー」「ヤー」などと、長音を「ー」で表記しておきながら、ここだけが「ウ」と混用されているのは如何なものか。やはり、本書のような教科書ではカタカナを表音上の具とみなして徹底し、長音は常に「ー」と約束するのが筋であろう。

6.2. アクセント

本書におけるアクセントの分類には、まったく賛成できない。P.99において、著者たちは独自の主張を披瀝し、

頭高 : テレビ、音楽

中高a : たまご、図書館

中高b : せんせい、携帯電話

平板： かばん、妹

という新しい分類法を開陳している。ただし、ここでいう「中高 a」とは、例示されている「たまご」、「図書館」のように

2番目の拍だけが高く、3番目以降は低い型 (p.99)

をさし、「中高 b」とは

2番目以降が高く、最後の1拍（または2拍、3拍の場合もある）が低い型 (p.100)

をさす、という⁴。

すなわち、従来の分類法における「尾高型」を排除した分類法が主張されていることになるのだが、はたして「中高」にa,b 2類を設定することと、伝統的な「尾高」を追放することとの得失に関しては、どのようなのであろうか。結論を先に述べておくと、残念ながら私にはこの本の著者たちに軍配が上がるとは考えられない。

理由は明白で、私がすでに第3節において指摘しておいたように、外国語としての日本語を教授する際には、いきなり音韻論的分析結果を与えるのでは情報が不十分なので、まずは音声学的分析結果に基づく特徴を教授すべきであるという主張にある。すなわち、この本の著者たちは日本語のアクセントは/高/、/低/の2段しか存在しないと信じており、しかも音声学的音節を認めずにモーラ（拍）一辺倒の分析をしているか

⁴ 「最後の1拍（または2拍、3拍の場合もある）が低い型」などというのは、極めてわかりにくい表現である。

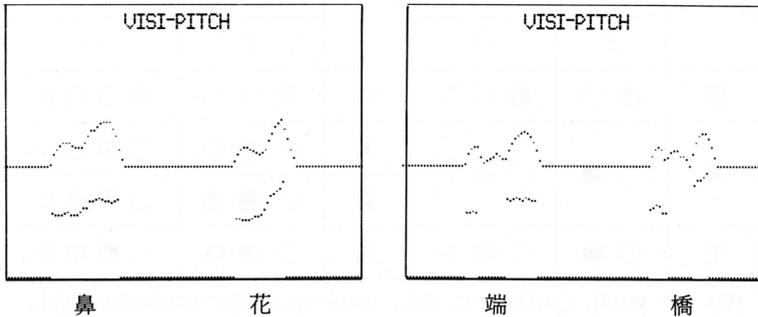


図07 平板型(左側)と尾高型(右側)との違い

らにほかならない。

具体的に述べると、たとえばp.100では「平板」という小見出しのもとで、

かばん
いもうと

を挙げている。しかし、「かばん」の尾部の高さは「いもうと」の尾部の高さとは異なる。同様のパターンは「端」と「橋」、「ねずみ」と「おとこ」などにも見られるもので、従来の見解では前者を「平板型」、後者を「尾高型」と呼んでいる。しかし、本書では双方とも「平板型」だとしてあるのだから、どうやら著者たちはこの事実に気づいていないらしい。なお、このことを音響データで示せば、図07のようになる。

すなわち、「鼻」の「ナ」は「花」の「ナ」よりも低い。同様にして、「端」の「シ」は「橋」の「シ」よりも低い。つまり、「花が」や「橋が」から助詞の「ガ」を引き算したら残りの部分は同じだなどと、単細

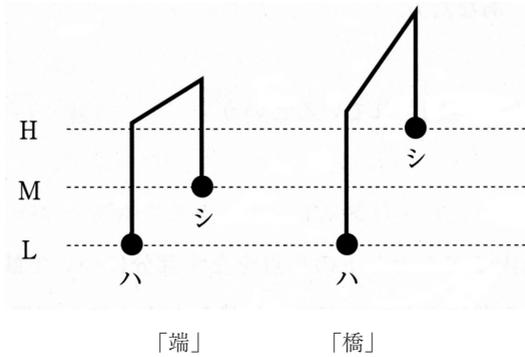


図08 音声学的レベルで捉えたH・M・Lの3段階

胞的発想をこのような言語事実に対して振りかざしてはならないということにほかならない。助詞の「ガ」に依存する以前から、根本的属性としてこれら「平板型」と「尾高型」との間には高さの違いが存在するのである。ここから、城生佰太郎（2008）などは音声学的レベルでは東京のアクセントにH（高）・M（中）・L（低）の3段階が必要であることを主張している（図08）。

次に、音声学的音節を認めず、モーラ（拍）一辺倒の説明に終始していることから出てくる矛盾について述べておく。この本の著者たちは、アクセントに対して音符を利用した説明をしているが、このこと自体は大変にわかりやすく優れている。しかしながら、次に示すような矛盾が随所に出てくる（図9）。

図09は、同書のp.104からの引用だが、図の上段に属す具体例として

なみだ（涙）、みどり（緑）、いのち（命）、みかん、せんしゅ（選手）、テレビ、トマト

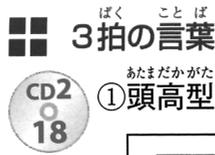


図09 音符によるアクセントとリズムの説明
インターカルト日本語学校 (2011:104) より引用

いっぽう、下段に属す具体例として

ていき (定期)、きょうと (京都)、きょうか (強化)、じょうし (上司)、ケーキ、ブーツ、チーズ、ギター

が挙げられている。いわゆるスラー (slur) でくくられている2音は、専門用語を用いれば2モーラ (拍) をまとめて1つの音声学的音節として調音せよという指示である。このこと自体は、まことに結構なことであり、なろうことならこの姿勢で本書の全編を通していただきたかったところであるが、中途半端に終わった点は、残念である。

具体的に示せば、「ていき (定期)」や「きょうと (京都)」などが下段の組なら、「みかん」や「せんしゅ (選手)」などが、どうして上段の

組に入っているのか。すなわち、「定期」を [テー・キ] と切るのなら、当然「選手」は [セン・シュ] とすべきであろうということである。

紙数も嵩んできたので、最後に著者たちのアクセントに事実誤認や不適切な例の挙げ方があることを指摘しておく。p.122の練習 (CD33) の「きて (来て)」はHLになっているが、逆のLHである。しかも、調音もかなり不自然で、初頭に高さを置きながら [i] を無声化させている。他地域の方言アクセントは別にして、東京ネイティブ・スピーカには考えられない不思議な調音である。

p.129の「～しい」の付く形容詞におけるCD 2-38に収録されている「あかくなかった/LHLHLLL/」、「あまくなかった/LHLHLLL/」、CD 2-39に収録されている「おいしい/LHHL/」、「おいしくない/LHHLHL/」、「おいしくなかった/LHHLHLLL/」、「むずかしい/LHHHL/」、「むずかしくない/LHHHLHL/」、「むずかしくなかった/LHHHLHLLL/」なども、教科書レベルにおける東京アクセントのデモとしては納得できない。特に、CD2-38のケースでは、実際の調音が上に示したように/LHLHLLL/となっているにもかかわらず、本の方は/LHLLLLL/となっていて、両者のあいだに食い違いが見られる。

文字を教える際に、いきなり草書体からは導入しないのと同様に、また文法を教える際にいきなり「見れる」、「食べれる」などのラ抜きことばから入っては行かないのと同様に、音声で東京型のアクセントを教えるのであれば、まずは東京生え抜きが用いている型を教えるべきである。すなわち、「あかくなかった」、「あまくなかった」などは/LHHHLLL/であり、「おいしい」は/LHHH/、「おいしくない」は/LHHHHL/、「おいしくなかった」は/LHHHHLLL/、「むずかしい」は/LHHHH/、「むずかしくない」は/LHHHHHL/、「むずかしくなかった」は/LHHHHHLLL/である。

7. 結語

以上、インターカルト日本語学校（2011）を具体例として、気づく範囲で日本語教育に焦点を合わせた音声の教科書がいかに多くの問題点を抱えているのかを述べた。このような現状に対し、今後の対策をひとことで要約すれば、日本語教育のための音声は、特に入門期の教育に際しては安易に音韻論に寄りかからず、できるだけ等倍の言語事実を学習者に示すよう努力することが不可欠である、ということになる。

【参考文献】

- 城生 佰太郎（1998）『日本語音声科学』、サン・エデュケーショナル
城生 佰太郎（2008）『一般音声学講義』、勉誠出版
城生 佰太郎（2012）『日本語教育の音声』、勉誠出版

【参照資料】

- インターカルト日本語学校（2011）『やさしい日本語の発音トレーニング』、株式会社ナツメ社